

岡山県海域で実施可能なガラモ場の再生手法の検討

美しく豊かな海の実現に向けて

【背景・目的】

- ・藻場は魚介類の発生、生息場所としての機能を有するほか、二酸化炭素の吸収源として注目されていますが、沿岸開発や、環境変化などにより減少してきました。
- ・アマモ場は水質環境の改善や再生活動により回復傾向にありますが、ガラモ場は回復傾向が見えず、再生手法も確立されていません。そこで、漁業関係者等が実施できる簡易な再生手法を検討しました。

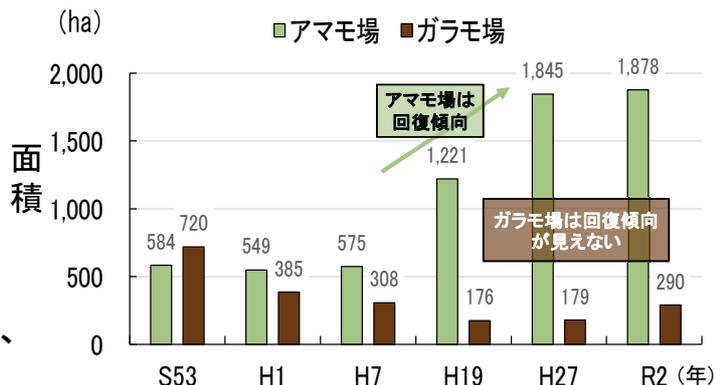


図1 岡山県の藻場面積の推移
(環境省「自然環境保全基礎調査」、県調査による)

【成果の内容】

〔人工採苗基質の天然海域への移植試験〕

令和6年10月に、アカモクを人工的に採苗・着生させたコンクリートブロック基質を食害防止「ネット無し」、「ネット有り」の2種作成し、D.L. (最低水面) -60cmの水深帯に設置して、モニタリング調査を実施しました。また、タイムラプスカメラを水中に設置し、基質に蟻集する魚を撮影しました。



図2 アカモクを着生させた基質

〔結果〕

「ネット無し」の基質では11月7日(水温22℃)の調査で食害痕を確認し、葉状部が消失し茎部のみとなっていました。

一方「ネット有り」の基質では食害は確認されず、12月19日(水温13℃)の時点で、最大96cmに生長した個体を確認しました。



図3 茎部のみとなった「ネット無し」基質のアカモク



図4 「ネット有り」基質のアカモク

〔タイムラプスカメラの映像〕

植食性魚類であるアイゴを確認しました。



図5 基質周辺で撮影されたアイゴの群れ

- ・基質をネットで覆うことで、順調に生長できることを確認しました。
- ・水温が22℃程度以下となると葉状部の消失は見られなくなりました。
- ・今後、ガラモ場再生の適地判定を行う際には、その海域における「食害の有無」を確認する必要があると考えられました。